

みんなで助け合おう 地震対策

互助

自主防災活動に参加しましょう

大災害が起こった場合、被害を最小限にとどめるよう防災関係機関は総力をあげて防災活動に取り組みます。しかし、大地震などによる災害では、同時に多発する火災をはじめ、道路の寸断、建物などの倒壊、急傾斜地の崩壊、地すべり等による被害、断水や電力供給の停止など多種多様にわたり、消防や警察などの公的機関による救護活動がすぐに行われない可能性もあります。

そんなとき、地域のみなさんが消火、救出、救護などの活動に取り組み、被害を最小限にとどめるようお互いに協力し合うことが必要です。



「自主防災組織」は、それぞれの家庭での日頃の備えや、いざというときの心がまえと共に、近所の人たちと協力しあい「自分たちの地域は自分たちで守ろう」という地域の防災活動を効果的に行うための組織です。自主防災組織の活動へ積極的に参加し、災害に強い地域をつくりあげていきましょう。

平常時の活動

自主防災組織の活動でまず重要なのは、防災上の知識、活動の必要性や重要性を1人ひとりに理解してもらうことです。

防災知識の普及 防災についての正しい知識を身につけるために、防災訓練や講習会を通じて防災知識の普及を行う。

地域内の防災環境の確認 災害が発生したときに、地域内に被害の発生、拡大につながる原因がないか、また、援助の必要な災害時要援護者の確認を行う。

家庭の安全点検 各家庭の災害時の安全対策を点検、整備する。

防災用資機材の整備点検 消火活動、応急手当、救出・救護、避難誘導などの活動用の資機材の整備点検。

防災訓練の実施 日頃から災害に備えて訓練を行い、消火器の使用法など防災活動に必要な知識や技術を習得する。



災害時の活動

自主防災組織では、非常時の応急活動の目標として、主に以下のような活動を想定しているケースが多く見られます。

情報班

災害に関する情報の収集と、住民に対する正しい情報の伝達。

消火班

出火防止および初期消火活動。

避難誘導班

住民の避難誘導活動。

救出救護班

負傷者の救出、救護所への搬送、救護活動。

給食・給水班

水や食料などの配分、たき出しなどの給食、給水活動。

避難所開設班

速やかな開設と運営。

要援護者対策班

災害時要援護者のサポート。



力を合わせて救出・救護を

大災害が起こった場合、消防や警察などの公的機関による救護活動がすぐに行われず、可能性もあります。そんなときのために、地域のみなさんが力を合わせた救出、救護活動が大切になってきます。

低い階のベランダから

避難ハッチを活用する。
避難ハッチが使用不能の場合も考えて、ロープや縄ばしごを用意しておく。
シーツや大ぶりの風呂敷などを結びロープの代わりにする。



重い家具の下敷きから

タンスの裏側はベニヤ張りの場合が多いのでそこを解体し、引出しを抜いて軽くする。



ガレキから

壁、柱、タイルなどの障害物を取り除くには、少しでも多くの人たちと力を合わせて取り組むようにする。



救出に役に立つ道具

軍手 ヘルメット ハンマー パール ジャッキ オノ のこぎり スコップ ロープなど

災害時要援護者が
安心して暮らせる

地域づくりの4つのポイント

風水害対策にも
共通します

日頃から災害時要援護者との交流を密にする

災害時の支援活動をスムーズに進めるためには、日頃から災害時要援護者とのコミュニケーションをはかっておくことが大切です。まず、挨拶を交わし合うようなことから始め、親しくなってきたら、災害時に何をしてほしいかなどを聞いておくといでしょう。



災害時要援護者自身の防災能力を高める

災害時要援護者が自力で初期消火や避難などができるように、災害時要援護者も参加する防災訓練を実施しましょう。外国人には「ジシン」「ヒナンジョ」など、災害時に必要な最低限の日本語を覚えてもらうようにしましょう。



災害時要援護者の身になって防災環境を点検する

避難路は車椅子でも通れるか、標識は外国人にもわかるか、耳の不自由な人にも避難勧告はきちんと伝わるか、といった点を点検し、いざというときに災害時要援護者が困らないように、まちの環境づくりを。



地域での支援・協力体制を具体化する

日頃の連絡は誰がするか、災害時には誰が誰をサポートするかなど、日常と非常時の支援方法・体制を明確にしておきましょう。一人の災害時要援護者に対して複数の住民による支援体制を組むことが大切です。

